

# 大世界史のなかのIFRS

—新自由主義とIFRS—

駒澤大学教授 石川純治

冒頭から私事で恐縮だが、1989年11月、私はアメリカのピッツバーグで世界史の転換点にいた。「ベルリンの壁崩壊」である。壁を斧でたたき壊す若者たち、そしてブランデンブルグの門前で壁崩壊を祝うベートベン第九の生演奏など、それらの実況中継に興奮して見入っていた。それから30年ほどがたったが、今大世界史ブームが再来している。

さて、今なぜ大世界史か、そしてそのこととIFRS(国際財務報告基準)とはかかわりがあるのか、ないのか。

## 大世界史ブーム再来 —今なぜ大世界史か

イギリスのEU離脱(6月23日)を受けて、2つの週刊経済誌が競うように同時に特集を組んだ。『週刊ダイヤモンド』(2016年7月16日号)ではまさに「大経済史」の文脈でEU離脱問題を、また『週刊東洋経済』(同7月16日号)ではEU危機を歴史の転換点として、それぞれ取り上げている。EU離脱やEU危機の世界史的意味を知り

たい読者には、まずもって紹介できる特集になっている。

では、今なぜ大世界史なのか。それは世界が極度に不安定化してくると、その裏返しでもあるが、世界を理解したい、あるいは世界を解釈したい、という切実な思いが生じるのは当然の成り行きといえるからである。とりわけ、混迷する現代を大きな不安のなかで生きるわれわれにとって、それは単なる知識欲ではなく、生きていくための知恵としての欲求といえる<sup>①</sup>。

端的に言えば、今日の資本主義社会が歴史の大きな転換点にきているということだが<sup>②</sup>、その点では大世界史ブームのきっかけは、なにもイギリスのEU離脱だけではない。例えば池上彰・佐藤優『大世界史』(文春新書、2015年)には、なぜ今、大世界史かの問いかけがある。対談で読みやすい形になっているのであわせて紹介したい。

特に重要なのは、世界の各地で起きている世界史的問題(EU危機だけでなく、ウクライナ問題、中東の混乱など)が根底でつながっていると

① この点で、歴史家ブローデルの印象深い言葉、「歴史学の任務のひとつは現在のさまざまな不安な問題に答えを出すことである」(傍点引用者)は、筆者が歴史学に求めるものを端的に言い表している。浜名優美『ブローデル「地中海」入門』(藤原書店、2000年)14頁。

② その点は、例えば『日本経済新聞』においてシリーズ「震える世界①~⑤」(7月2日~7日)、「問われる資本主義①~④」(8月9日~12日)の表題にも表れている。前者では特にエマニュエル・トッド氏のインタビューを、また後者では岩井克人教授の論説を読まれるとよい(あとの注15参照)。

いう点である。このつながりのなかで見ていくと、つまりその根底にあるものから見ていくと、IFRSも必然的にかかわってくるわけで、IFRSのなかだけを見ていてはその拠って立つところ、つまりそのかかわりが見えてこない。ここに、世界史のなかのIFRSという見方が重要になってくるのである。

以下、読者にはあまりなじみのないものもあるかと思うが、示唆深い本をいくつか紹介しながら話を進めてみたい。

## 全体史からの視点 —現在を知る

よく引用されるが、「文明は商業の親であり、会計は商業の子であるから、会計は文明の孫」(アーサー・ウルフ)というのがある。言うまでもないことだが、会計はそれ自体が一人歩きするわけではなく、商業や経済の歴史とともに歩んできたわけである。

会計が「商業の子」のみならず「文明の孫」であるなら、文明史的な文脈で会計をとらえる視点が必要になるだろう。とりわけ、今日のような歴史の大きな転換点にあっては、新たな会計基準の検討も必要だが、より大きな歴史軸から現在を知ること、その拠って立つところを理解することがいっそう重要になる。

ここでは、一般の実務家には無縁のように映るかもしれないが、特に比較社会論的視点から興味深い古典的文献を1つ紹介してみたい。カール・ポラニー/野口建彦・栖原学訳(新訳)『大転換(The Great Transformation)』(東洋経済新報社、2009年)である。まさに本稿のテーマそのものだが、本稿の文脈においては副題の*The Political and Economic Origins of Our Time*の“Origins”が重要になる<sup>③</sup>。全

③ 1944年の初版(イギリス)では*The Origins of Our Time*と題して出版されている。なお、ポラニーはポランニーと表記されることが多い。

21章の大部な本だが、訳者による各章の概要紹介もあるので、手取り早くはそこから全体像をつかむことができる。

特に、そこで論じられている今日の資本主義社会とそれ以前(前資本主義社会)の貨幣・交易・市場との比較相対は、伝統的社会と現代の自己調整的市場社会との経済史・文明史・人類史的比較論研究として、まさに「20世紀の古典」といえる。問題は、そのことがIFRSとどうかかわるかである。

ともかくも、ここで少なくとも言えることは、資本主義が史的システムならその基盤の上にたつ会計もまた史的システムであり、その全体史から現在の位置を知ることが重要になってくる、ということである(※補足1)。

### ※補足1：会計史研究の伝統的方法

ちなみに、ここでの文脈において会計史研究の伝統的方法に少しだけ触れておこう。すなわち、会計史研究というと、例外はあるものの、主として歴史を遡る商人の帳簿や簿記書などの文献を軸にしたものが主流といえるが、むしろそれだけが会計史ではない。後述する複式簿記の生成史も近代・現代会計の発展史も、簿記・会計という小さな世界であるが、より大きな社会経済さらには文明の歴史的文脈のなかでとらえる視点(大世界史のなかの簿記会計)が必要といえるだろう。

## ワシントン・コンセンサスとIFRS —歴史の教訓

さて、『大転換』第1章では19世紀文明が4つの制度(バランス・オブ・パワー、国際金本位制、自己調整的市場、自由主義国家)から成り立っていることが論じられているが、ここでの文脈では特に自己調整的市場という点が現代の新自由

主義とのかかわりで重要になる。

同書の「序文」を担当したスティグリッツも、同じく「紹介」を担当したポラニー研究の第一人者ブロックも、ともにポラニーの現代的有効性としてワシントン・コンセンサス、すなわち自由市場原理の拡大を目指す経済戦略に触れているが<sup>④</sup>、この点は現代会計の根っ子に何があるかを知るうえで重要なところといえる(※補足2)。

ここで、次のような大きな歴史軸を描いてみよう。そうすると、現代会計の根っ子にあるものが見えてくる。少なくとも筆者にはそう思えてくる。すなわち、先にみた①自己調整的市場自由主義の確立(19世紀イギリス)→②新自由主義→③ワシントン・コンセンサス(20世紀アメリカ)→④グローバル・ポリティックス、グローバル・ガバナンス→⑤現代会計のあり方(会計基準の国際的統合化、国際的規制)、である<sup>⑤</sup>。

拙著『揺れる現代会計』では「IFRSに代表される現代のアカウンティングもそうした世界戦略・編成の一環としてある」(178頁)と述べたのもその1つだが<sup>⑥</sup>、その世界戦略・編成の一環という点は、実は新自由主義と普遍語という視点にもつながってくる。

※補足2：ワシントン・コンセンサスと新自由主義

ここでの論議に関心のある読者には、『大転換』の「序文」と「紹介」に加えて、訳者あとがきを読まれることをお勧めする。そして、スティグリッツもブロックも言うように、同書が現代世界の危機を理解するのに不可欠な書物であることを読み取ってもらえればと思う。

ここでは、次の一節だけ引用しておこう。特に歴史の教訓という点が、冒頭での問い(今なぜ大世界か)ともかかわる。

「不幸にして、正統派自由主義の現代版たるワシントン・コンセンサスの信奉者がこの19世紀の教訓を思い出すことはほとんどないのである」(スティグリッツ、傍点は引用者)。

「この市場自由主義の教義は、1980年代以降、とりわけ1990年代初頭の冷戦の終焉とともに、サッチャーリズム、レーガニズム、新自由主義、さらに『ワシントン・コンセンサス』の名のもとに、グローバル・ポリティックスを支配するようになった」(ブロック)。

## 新自由主義と普遍語

### — 覇権的な言語という見方

慣習や文化、そして言語は実は会計ともかかわる<sup>⑦</sup>。会計研究者の“頭脳流出”の筆頭格と

④ 関連して紹介しておく、拙著『変わる会計、変わる日本経済』(日本評論社、2011年)トピック14「秩序ある市場主義をめぐる」では、「市場には心がない」(サムエルソン)をふまえながら、都留重人やインドの経済学者アマルティア・センの「市場と倫理」に関する議論を行っている。

⑤ 近年における③→④については、国際金融規制での会計規制という新たなあり方が登場している。『変わる会計、変わる日本経済』トピック4「サブプライム問題と会計」(G7、金融安定化フォーラム)、トピック15「IFRS導入の『日本版ロードマップ案』公表へ」(ダボス会議、金融サミット)など参照。

⑥ 詳しくは、拙著『揺れる現代会計』(日本評論社、2014年)178頁の補注3「ワシントン・コンセンサスとアカウンティング・コンセンサス」参照。特に、ワシントン・コンセンサスがアメリカ金融界の利益を代表する考え方である点が指摘される。

⑦ ここで文化と文明の区別に触れておくことが、ここでの文脈とかかわる。この点で阿部謹也『自分のなかに歴史をよむ』(ちくま文庫、2007年)が有益だが、特に文明と区別される文化の特質(地域性、特殊性、非合理性)に触れて、その中に言語を含めている点が重要になる(148-151頁)。ちなみに、同書は「自分のなかに」(自分の外ではない)というタイトルに魅せられて何度か読んだが、その自分史風(学問的来歴)の叙述は魅力的でお薦めしたい本である。

もいえる井尻雄士カーネギーメロン大学名誉教授はカーライルの「衣装哲学」をひいて会計の本質を慣習の力に見出しているが<sup>⑧</sup>、この点はシャム・サンダー教授(イエール大学)が強調するsocial norms(慣習、慣行、習わし)に通じる。

すなわち、会計基準(ルール)の世界一本化・一元化(IFRS化)に批判的なサンダー教授は、「ただ言えるのは、会計基準設定主体の独占を許すということは、少なくともこのsocial normsから離れていく方向にあることは間違いないと思います。…(中略)ルールも必要だけれども、ルールだけでは駄目だと。rulesプラスsocial normsがなければならない」(傍点は引用者)と述べているが、social normsの多様性とrulesの世界統一(独占)とは対局にあるといえる<sup>⑨</sup>。

ここで、特にこのsocial normsとも密接にかかわる「言語」の観点からIFRSをみると、ここでもまたその根っ子に何があるかが見えてくるように思える。すなわち、先にみたワシントン・コンセンサスに象徴されるが、そこでの新自由主義的政策(特に資本の国際移動)がグローバル戦略ゆえに「普遍語」志向とつながっている点が重要といえる(グローバル企業のビジネス環境整備の一環)。

この点で、もう1つ興味深い本を紹介しよう。施光恒『英語化は愚民化』(集英社新書、2015年)である。そこでは「普遍語」と「土着語」(母国語)の示唆に富む論議がなされているが、同書の随所にてでくる普遍語化(英語化)をIFRS化と読み替えれば、新自由主義と普遍語(グローバル言語)

としてのIFRSのあり方(覇権的な言語)も見えてくるだろう。言語は単なる表現の手段ではなく、文化、社会、政治と密接につながっているのである(※補足3)。

ちなみに、覇権的な言語としてのIFRSという見方に関連して、複式簿記の世界伝播(14、15世紀のイタリア→17世紀のオランダ→18、19世紀イギリス)に触れておくと、その伝播の過程が実はその基礎にあるヘゲモニー移転とびったり重なる(簿記史と経済史との照応)。

この興味深い点は『揺れる現代会計』(11-13頁)を参照されたいが、特に(実物経済の利潤率の低下による)ヘゲモニー移転に経済の金融化が伴うという点は、今日のIFRSのあり方への視点につながってくる<sup>⑩</sup>。

※補足3：言語のもつ覇権性—帝国、統治、言語  
冒頭で紹介した池上・佐藤『大世界史』(218-220頁)でも、国家(トルコ、中国、ロシア、戦後日本)の言語への介入に触れているが、そこに言語のもつ覇権性が表れている(帝国、統治、言語)。加えて、教育システムが新自由主義に組み込まれるという点も重要なところで(同220-221頁)、その点は今日の大学でのIFRS学やIFRS教育のあり方を相対的にみる視点になるだろう<sup>⑪</sup>。

ちなみに、先に「普遍語」と「土着語」(母国語)という点に触れたが、関連してここでもう1つ紹介しよう。水村美苗『増補 日本語が減びるとき—英語の世紀の中で』(ちくま文庫、2015年)である。水村氏は『續明暗』(漱石の未完小説『明暗』を書

⑧ 詳しくは、『揺れる現代会計』の13「衣装哲学と会計の本質」参照。

⑨ 詳しくは、『揺れる現代会計』PartⅡの対談Ⅰ「シャム・サンダー教授に聞く」参照。

⑩ その一例として、金融セクターが世界経済の主役とするCFA協会の「包括的ビジネス報告モデル」を挙げておきたい(『揺れる現代会計』98-99頁)。

⑪ 特に、本当のエリートの姿勢という点が、とりわけ「エリートのナルシズム」との対比において重要なところといえる(同書228-229頁)。ちなみに、筆者はかつて「バランスを失ったグローバリズム論に陥っているのは経済人のみならず、大学人にもけっこう多い」(『変わる社会、変わる会計』日本評論社、2006年、272頁)と記した。

き継いだ作品)でデビューし、その後次々に作品を発表している作家だが、同書は端的に「英語の世紀の中で」にもあらわれているように、ここでの文脈とかかわっている。つまり、英語の世紀のなかで滅びる日本語に、IFRS(普遍語)の世界浸透によって滅びていく日本の会計基準(母語)を重ねるわけである。

ここで、筆者がとりわけ重要に思えるのは、母語と思考との関係である(同書419頁の「自然科学と母語の関係」など)。この重要な点は、先に紹介した施『英語化は愚民化』でも触れられているので参照されたい(176-179頁、創造性を損なう外国語での思考)<sup>12</sup>。

## Angロサクソン・モデルの本質と世界伝播

### —IFRSの根っ子にあるもの

以上の議論に関連して、最後に国際会計基準(IFRS)の仕立屋は誰か、という問いを出してみよう<sup>13</sup>。すると、そこにAngロサクソン・モデルの本質とその世界伝播という、現代会計のもっとも根っ子にあるところの理解につながってくる。

Angロサクソン・モデルについては、かなりの大著であるが、渡部亮『Angロサクソン・モデルの本質』(ダイヤモンド社、2003年)をお勧めしたい。そこでは、Angロサクソン・モデルを株主資本主義としてとらえているが、興味深いのはそれを「貨幣」、「法律」、「言語」の3つの要素から分析している点である。本稿の文脈からは「言語」が1つの要素になっている点<sup>14</sup>が重要で、それは先の言語の覇権性の議論ともつながってくる。

繰り返しになるが、現代会計の変容は、そういう根っ子にあるものからみないとなかなか見えてこないのである。ここでは、次の一節だけ引用しておきたい<sup>15</sup>。

「企業会計の今日の変容をその基礎にあるものからとらえるという視点は重要である。たとえば英米基準の基礎にあるもの、とりわけCommon Lawにかかわるデファクト・スタンダード(事実上の標準)という視点が重要だ。図式化すれば、機関投資家および投資銀行→Angロサクソン・モデルの伝播→デファクト・スタンダードの国際的浸透→IAS(IFRS)などの会計基準の国際化、という構図である。こうした英米基準の基礎にあるもの(端的にはAngロサクソン・モデルの本質)、とりわけその生成変遷の理解なくして、今日起きている会計諸問題のよってたつところはなかなか見えてこない。さらにいえば、こうした株主(投資家)資本主義が資本主義経済の1つのあり方(“Angロサクソン流金融資本主義” —石川)にすぎず、したがってその生成変遷の一過程であることをふまえたうえで、今日的会計現象を捉える視点(史的・総体的相対化)が重要になる」(傍点は引用者)。

重要なことは、世界経済の大きなスパンでの構造変化や資本主義経済のあり方が一様でないことを踏まえたうえで、英米型世界標準の史的相対化の視点をもつことである。すでにみてきたように、IFRSは単に会計ルールの世界基準というレベルではないのである。

ここで3点だけふれておこう。第1はその図式化の出発点(機関投資家、投資銀行)が重要で、注10で触れた金融セクターが世界経済の主役

<sup>12</sup> 例えばフィリピンの言語状況(246頁)やインドでの英語教育の問題点(178頁)を読まれるとよい。

<sup>13</sup> 『揺れる現代会計』100-101頁の「会計基準の“仕立屋”は誰か」に基づいている。

<sup>14</sup> 拙著『変貌する現代会計』(日本評論社、2008年)コラム11「Angロサクソン・モデルの伝播」(277頁)より抜粋。

とする点とかかわる。重要なことは、そこでの報告モデルが全面公正価値会計モデルや概念フレームワークに重要な影響を与えているという点である(『揺れる現代会計』98頁)。

第2はデファクト・スタンダードという点だが、それが公的機関の定めた標準規格でない点、つまり既成事実として市場を支配する規格であるという点が重要である。先の「言語」でいえば、普遍語(英語)がその意味で言語世界のデファクト・スタンダードといえる。

第3に、株主(投資家)資本主義が資本主義経済の1つのあり方であると記しているが、その点は冒頭での議論(今なぜ大世界史か、歴史の転換点)にも通じている<sup>16</sup>。

以上、すでに述べたように、資本主義が史的システムならその基盤の上にたつ会計もまた史的システムであり、その全体史から現在の位置を明らかにし、将来の見通しを示すこと、これがアカデミズムの重要な任務の1つといえるだろう。

## 付記：イギリスのEU離脱とIFRS —消滅の危機

イギリスのEU離脱が世界の会計界に与える影響を直接論じている論考がある。田中弘「国際会計基準、消滅の危機」(『金融財政ビジネス』2016年9月15日号)である。そこでは会計界に与える影響を「天地がひっくり返るほどの衝撃

が待っている」と論説している。IFRS消滅の危機である。

なぜ消滅の危機なのか、IFRS推進派の人には大胆で過激な発言のように聞こえるだろうが、その論説の賛否はともかくも、著者は世界史的な文脈からIFRSの出自とその行方を論じることのできる数少ない会計学者だけに、その根拠や背景に注意しながら一読されることをお勧めしたい。

ちなみに、田中教授はこれまでIFRS関連の著作を次々に世に出しているが、そこでは会計の中に終始するのではなく、より大きな観点からIFRSの正体(真相)を明かそうとしている。例えば、田中弘『国際会計基準はどこへ行くのか』(時事通信社、2010年)があるが、その筆者による書評の一端をここに抜粋しておこう。

「本書には、会計以外の書物の引用が随所にでてきて、著者の読書家ぶりがうかがえる。政治化する会計を読み解くには、もはや会計の本の中だけでは見えてこない。『見える力』の源泉のひとつはそのあたりにありそうだ。」(本誌2010年11月29日号)

会計の中での議論ももちろん必要だが、その背景にある政治や経済そして大きな歴史の文脈でみていくことが、その拠って立つところを明かすという点でいっそう重要になる。そこにこそ、洞察力(見える力)の源泉がある。

<sup>16</sup> 冒頭の注1の「震える世界②」(トッド)ではEU離脱が歴史の循環のあらたな始まりであるという点を、また「問われる資本主義①」(岩井)では米英型資本主義の中核にある「株主権論」の破綻という点を、それぞれ読まれるとよい。なお、英米型世界標準の史的相対については、『揺れる現代会計』の2「資本主義の多様性とIFRS」で論じている。